

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

New Holland say 'Think Pink'

オーストラリア

ニューホランドは女性の味方



クィーンズランド州で開催された農業機械展示場でピンク色に塗装されたニューホランド社製のTC26DA型トラクター。傍らに立つのはレナータ・ブラーツとマイケル・ウィリアムズの両氏。

これから数カ月間、ピンク・トラクターはオーストラリア国内各地の農業機械展示会で登場する予定。同国では8人に1人が85歳までに乳癌になり、毎日36人の女性が乳癌と診断されている。

乳癌になる危険は誰にでもあるし、一生の間身近な人が乳癌で苦しんだり、治療を受けたりする可能性がある。そのことの認知を広めるべきだと主張するのはニューホランド社の販売部長サイモン・ヴィガー氏だ。彼は同社のピンク・トラクター運動がNBCFの活動を安定的に続けるための支援になっていると話している。

これら5台の小型モデルもピンク色に塗り替えてオーストラリア国内で販売し、その売り上げから1台あたり1000ドルを国立乳癌基金（以下NBCF）に寄贈することにした。さらに50台限定でNBCFのステッカーを貼ったトラクターの売り上げから1台あたり500ドルが寄付される。



ピンク色のトラクター玩具を使った販売促進が好評だったニューホランド社。さらに一歩進んで5台の小型モデルもピンク

Tracked progress on soft ground and snow

フィンランド

ぬかるみも雪も踏み越えて



スキー場、泥炭生産地、一般農耕地など、ケラ氏のクローラ式トラクタが活躍できる場所は数多い。

その古い機種は稼働時間が5000時間を超えたので、入手が簡単な市販の製品と交換しようとして考えたケラ氏だったが、考えを変えて自分だけの最高の機械を作ってみようかと決断し、ヴァルトラ社製N111型トラクタをベースにして、幅80cm長さ3・2mのクローラを装着した。古い機械は1時間当たり20ℓの燃費で、牽引力はたったの870kgだった。新しい機械では1ℓの燃費で2400kgを牽引できる。

冬の間にフィンランドで稼働する機械の仕事が減ることはない。フィンランド中央の内陸部を拠点にしてスノーウ

エイ社の名前で営業しているヘイッキ・ケラ氏は、冬の間スノーモビルやスキーヤーのために5000km以上の雪道コースを維持管理する仕事をしている。昔はこの作業は大変な苦労だった。というのもケラ氏が以前に使っていたクローラ式車両は、雪面を平らにする作業機を牽引するスピードが遅いうえに、あきれ

るほど燃費が悪かったのだ。



その古い機種は稼働時間が5000時間を超えたので、入手が簡単な市販の製品と交換しようとして考えたケラ氏だったが、考えを変えて自分だけの最高の機械を作ってみようかと決断し、ヴァルトラ社製N111型トラクタをベースにして、幅80cm長さ3・2mのクローラを装着した。古い機械は1時間当たり20ℓの燃費で、牽引力はたったの870kgだった。新しい機械では1ℓの燃費で2400kgを牽引できる。

I wanna ride my trike

オランダ

三輪トラクターはいかが？



三輪構造の利点を活かすために、2本タイヤの前輪は通常の車軸に装着されているが、延長ドライブ・シャフトを割り込ませることで、後輪の位置からは十分に離れている。そのシャフトの先端部は従来のディファレンシャルギアに接続している。

三輪構造の利点を活かすために、2本タイヤの前輪は通常の車軸に装着されているが、延長ドライブ・シャフトを割り込ませることで、後輪の位置からは十分に離れている。そのシャフトの先端部は従来のディファレンシャルギアに接続している。

オランダのノルドオストボルダー市内のクレイル村で、ヴァルトラ製品を取り扱うオフリンガ社は2台のT171型アドバンス・トラクターを三輪仕様にした。改造を要請したのはバント市を拠点とするニンジン生産を請け負うアグロヴィジョン社。最大の特徴は植え付け作業が終了した後に従来のトラクターに戻せることだ。



オランダのノルドオストボルダー市内のクレイル村で、ヴァルトラ製品を取り扱うオフリンガ社は2台のT171型アドバンス・トラクターを三輪仕様にした。改造を要請したのはバント市を拠点とするニンジン生産を請け負うアグロヴィジョン社。最大の特徴は植え付け作業が終了した後に従来のトラクターに戻せることだ。



Accumulator is a safe bet

米国

安全確実なアキュムレーター



自身が発明した干草アキュムレーターで、仕組みが単純であることを説明する発明家兼農業経営者のケニー・クーンズ氏。

船で輸出されている。

クーンズ氏が目を付けているのは馬の飼育用に流通している18kgのベールで、貯蔵状態をよくするためにベールの縁から地面に降るせるアキュムレーターも製作した。セットアップは簡単で、ユーザーはヒッチ・ピンが正しく、ベール・チェンバーの125mm後方で中央位置になっていることを確認するだけで、ベール・チェンバー内の圧力が減り、シユートの頂上にベールを押し上げることで発生する押し下げ圧力と釣り合う仕組みになっている。クーンズ氏によれば、プレッシャーに余分な圧力は掛からないという。既に米国内で数台が売れており、フランス向けに1台が船で輸出されている。

地上に降ろされたベールは運搬装置が付いたスキッドステア・ローダーやトラクターが拾い上げ、機種によって8個から18個ずつワゴンやトラックに積み込んで運び貯蔵する。

頂上に達すると引力で向こう側に落ちて行き、列の最後になるベールが隣の列の仕切りを開けて行き、集積台がいっぱいになると下のゲートが開いてベールは一齐に地面に滑り降りる。ベールが降ろされると同時に、パネとカウンターウエイトの働きで仕切りやゲートが初期の位置に戻るから、人の手は一切不要で、次のベールが滑り込んで来るまでたっぷり時間がある。



農業経営者自身が発明家で機械メーカーであれば鬼に金棒だろう。その好例が米国オハイオ州から出て来たクーンズ社製の干草アキュムレーターだ。ケニー・クーンズ氏は、自身が干草を収穫・調整する機械を開発した理由は単純で「私がこれだと思っ物が市場に無かっただけのこと」と言う。彼の干草アキュムレーターは余剰エネルギーを使って角型ベールをベラー・プランジャー（干草圧縮梱包機）から前方のシユートの頂上へと押し上げる。

Brazilian drill goes to Work in South Africa

南アフリカ

ブラジル製ドリルシーダ、南アフリカへ



グリホサートを散布した後、ミレットなどの雑穀が植え付けられる。



PDCP式ドリルシーダが、幅2mに13条の播種作業をしてから26日後の様子。

節が可能だ。表面に螺旋状の溝を刻んだ鉄製のドリルが、効率よく播種作業を進めていた。

施肥用と播種用の二重ディスクの絶妙な組み合わせが土壌表面の形状をつくり、同時に深度調整ホイールによって一定の深さで、次々に種が播種される仕組みだ。鎮圧ホイールの地面に対する圧力と角度、そして車輪間隔も調節が可能だ。

不耕起型のドリルシーダは、基本的に土壌タイプが異なっても、多様な耕地に対応できるようにしている。また、作物残渣の多少にかかわらず作業が可能だ。播種間隔が最大で400mmまで広がる円盤型ディスクがこの機種の特徴。これが地面に適度の振動を与えることで、軽く耕起された状態の細い溝を作る。種子と土壌は理想的な接触をするようになって、発芽が早められる。

ブラジルのマルシエサン社は南アフリカのクワズール・ナタール州で、同社製PDCP方式のドリルシーダの播種試験に成功している。



不耕起型のドリルシーダは、基本的に土壌タイプが異なっても、多様な耕地に対応できるようにしている。また、作物残渣の多少にかかわらず作業が可能だ。播種間隔が最大で400mmまで広がる円盤型ディスクがこの機種の特徴。これが地面に適度の振動を与えることで、軽く耕起された状態の細い溝を作る。種子と土壌は理想的な接触をするようになって、発芽が早められる。